

感動をありがとう

聖光学院野球部 初のベスト4進出

伊達市や全国に感動を与えてくれた
聖光学院野球部。
福島県勢 51 年ぶりの
夏の甲子園ベスト4進出を果たし、
伊達市の名を全国に広めてくれた。



写真提供「福島民友新聞 令和4年8月19日付」

市内でも応援が盛り上がった



聖光学院では毎試合生徒が応援



市役所でもパブリックビューイングを行った

2 勇気と感動をありがとう

020年、新型コロナウイルスの感染拡大により、夏の甲子園が中止。その年は聖光学院の連続出場の新記録となる14連覇のかかる大会となるはずでした。その中で行われた県の独自大会で優勝。勢いに乗り東北大会の決勝で仙台育英を破り優勝しました。翌年は、2年ぶりに夏の甲子園大会が行われ、再び14連覇へチャレンジする年でしたが、県大会準々決

勝で光南に破れ、連続出場の記録が途絶えました。今年は、県大会決勝で光南にリベンジを果たし、3年ぶりの夏の甲子園出場。日大三など優勝経験校が5校も入る死のブロックといわれる中を勝ち抜き、初のベスト4進出を果たしました。準決勝では、仙台育英との東北対決に涙をのみました。一球への集中力、泥臭く全力を出し切る姿は、全国の野球ファンを魅了し、勇気と感動を与えてくれました。



狩野 泰輝さん

5試合連続安打 伊達市出身

振り返ると、県外の人も多く、厳しい中で戦うと自分の中で覚悟を決めた入学でした。はじめはなかなか寮生とコミュニケーションをとるのが難しかったけど、絶対に地元として負けられない思いは



山浅 龍之介さん

昨年の夏も経験 扇の要

入部した時から佐山とは同じチームで組んできました。3年の間に、言葉を交わさずとも投げたい球が分かる関係になってきたと思います。佐山が夏の大会に入って、けがもあって調子が上がらなかつ



佐山 未来さん

聖光学院の絶対エース

甲子園は特別な場所で、マウンドに立っていて、いつも以上に力が出て、投げていて楽しい場所でした。甲子園では強い球を投げたい思いはあったけど、低めに丁寧に投げることを意識していました。



赤堀 颯さん 主将

5試合連続先頭打者で出塁

この仲間と最後まで同じ思いで戦い抜けたことが何よりの財産です。ベスト4が一番じゃなく、それまでの過程が一番で、それにベスト4がついてきたことは聖光学院にとって大きな結果だったと思

あったので、その思いが最後の夏につながりました。帰ってから「感動をありがとう」などと声をかけられ、私たちが皆さんに感動を与えられたのかなと実感が湧きました。地元の選手としてメン

た中で、精一杯最後まで投げ込んでくれたことがうれしくて、佐山と組めて本当に良かったと思います。赤堀を中心に、チーム全員が全国のどのチームよりも日本一にこだわりを持ってやっ

県大会後の10日間の練習で、投げ込み、走り込みが徹底的にやれたことが甲子園のピッチングにつながりました。仙台育英戦は打たれたけど、コントロールと緩急をつけた持ち味を最後まで貫き通

います。キャプテンとしてみんな同じ方向を向くことも大事にしましたし、一人ひとり違ってもいいということも大事にしました。一人ひとりの色を生かす集合・結集体のチームに

てきた自負があります。結果的には日本一になれなかったけど、苦しい局面で踏ん張れたり、ここぞという局面で1本が出たりしたことが、ベスト4という結果につながったと思います。

せたのかなと思います。仲間がピンチにファインプレーや、点数を取られたら取り返してくれました。それがなかったらベスト4の結果は残せていなかったと思うので、仲間に感謝したいです。

なればという思いでまとめてきました。全国で常連から常勝になっていくには、もっと強い野球を求められるので、卒業まで全力でサポートして、強くなる後輩を見ていたいと思います。

バーに入ったことで、市内の野球人口が増えたり、希望を持ってもえたらありがたいです。応援されるチームを目標にやってきたので、いいチームで最後まで戦い切れて最高でした。

Special Interview

聖光学院野球部の歴史を塗り替えた

聖光学院で野球がしたいと入部した選手たちと、勝つにふさわしい人、チームになるため日々歩んできた。ベスト4の原動力、感動を与えるチカラはどこにあるのか、監督、選手たちがこれまでの歩みを振り返る。



聖光学院野球部監督
齋藤 智也さん

Saito Tomoya

今夏の甲子園の戦績

1回戦	●	4対2 日大三
2回戦	●	3対2 横浜
3回戦	●	8対1 敦賀気比
準々決勝	●	10対5 九州学院
準決勝	●	4対18 仙台育英

今夏の主な記録

聖光学院初のベスト4
福島県勢 51年ぶりのベスト4
夏通算 20勝目達成 (対日大三) ※
※福島県勢初

「人間力野球の常識が変わった」

最大限に燃焼できた夏

高校野球って心でやるものだなと証明できたことが何よりうれしい。結果もうれしいが、精神を極めようと努力し、高い志で戦うと、スタート段階で力がなくて頼れないと思われたチームでも、ベスト4という結果が訪れることがある。この結果を導き出した歩みは発見だったし、一番理想とする野球ができ、高い壁を超えるという結果が伴って、最大限に燃焼できた夏だった。

今年のチームの戦力でいくと甲子園に行けるか行けないかというチーム。例年よりも技量で落ちるチームが歴代でも最高の結果を出したということ、しかも対戦した相手

破っていることはどういうことなのか。スカウティングをして上まで勝ち上がる野球をやっているチームはうらやましくもあるが、うちはスカウトをしない野球を標榜してい

る。うちの価値観に基づいた人間力野球の限界かなと思っていたものが、実はそうではなかった。人間力を高める、あるいは、試合で自分の力を引き出す能力を高めるという意味では、チーム作りの限界はまだまだ無限だったんだなと、力がなくても勝つことは可能なんだとわかった。人間力を高めることにターゲットを当て、赤堀を中心に選手間でミーティングを重ね、練習にこだわり、1分1秒も無駄にしないで徹底的にチームを作りあげたことは、今までの常識やこれまでの我々の経験を覆す歩みだった。

試合を重ねるごとに数多くのメッセージを寄せていただいた。そのほとんどが「選手の躍動する姿を見ていて感動した」と。ベスト4になったことより、選手たちがそこまでやり切ったことが皆さんに伝わって感動が共有できたとすれば、それが一番の喜び。一緒に戦ってくれた皆さんに心から感謝しています。